

文法外コミュニケーション能力の指導*

齊 藤 仁 志**

Teaching proper Non-Grammatical-Competence

Saito, Hitoshi**

【キーワード】

- ①多文化共生
- ②人間関係の構築そして維持
- ③文法外コミュニケーション能力 (NGC)
- ④発話意図
- ⑤プロソディー

1. はじめに

ほぼ全ての先進国で人口減少がおり、豊富な人的資本を有する高度人材の世界的な人材獲得競争が激化している。そうした中、高度人材の予備軍である留学生を多く獲得しようという狙いで2008年1月、福田内閣は「留学生30万人計画」を打ち出した。また経済連携協定 (EPA) に基づき、タイ、フィリピンなどから看護師、介護福祉士の受け入れが始まろうとしている。日本は本格的に多文化共生社会を目指し動きだした。

こうした来るべき多文化社会に向け、受け入れ側の日本は何をしておく必要があるのだろうか。多文化共生のための法制度の整備、多文化共生を推進しやすい環境整備、そして国民一人一人が多文化共生の必要性や意義について十分に理解すること、また多文化人共生のための能力、「多文化共生力」をホスト、ゲストが共に身に着けることが必要となる。本稿では多文化共生力の大きな核となる人間関係の構築そして維持のためのコミュニケーション能力について考察し、2008年後期授業で行われた日本語スピーキングⅡでの授業実践を報告する。

2. コミュニケーション

2-1. 文法能力 (GR)

従来の語学教育では、シンタクス、語彙、発音、文字などの広義での文法能力 (以下、GR) を主な教育対象とし、それらの正確さを重視してきた。例えば、『みんなの日本語』(スリーエーネットワーク, 1998) には次のような会話練習がある。

あなたの パソコンは 新しいですか。

……いいえ、() 古いです。

『みんなの日本語初級Ⅰ本冊』p.71

括弧内に「新しくないです」と否定形を答えることが求められている。しかし、ただ単に否定形を作る練習であれば会話形式の問題にする必要はない。また自然な会話であれば、「いいえ、新しくないです。古いです」と取り立てて答えずに、「いいえ、古いです。」であっても良いだろう。学習者からもしばしば「いいえ、古いです」だけでは誤用なのか、日本語では必ずこういった言い回しなのかと問われることがある。野田 (2007 pp 9-10) では、「正確さ重視の文法から目的を達成できる文法へ」という節で次のように述べている。

これまでの日本語教育では、正確さを重視してきた。ある文法形式を教えるときも、正確に理解できるとともに、正確に使用できるようにさせようとするが多かった。正確に使用できるようにしないと、その文法項目を習得したことにならないという強迫観念があったからだろう。(中略) 正確さより、目的を達成できるかどうかを優先させて必要な文法項目を考え直すとともに、狭い意味では文法項目と考えられない戦略も重視したい。

2-2. 文法外コミュニケーション能力 (NGC)

GRの正確さは確かに必要な能力ではあるが、GRさえマスターできればコミュニケーションが成立するわけではない。仮に、たとえ何度「すみません」と流暢に正しく言ったとしても、相手に誠意が伝わらなければ適切なコミュニケーションとは言えず、またよい人間関係は構築できない。実際のコミュニケーション場面には、従来教育対象としてきたGR以外にも数多くのコミュニケーションルールが存在し、それらの適切な運用が求

* Received January 31, 2009

** 長崎ウエスレヤン大学 現代社会学部 国際交流学科、Faculty of Contemporary Social Studies, Nagasaki Wesleyan University, 1057 Eida, Isahaya, Nagasaki 854-0081, Japan

められる。例えば、誰と話すか、何を話すか、どのように話すか、発話をどう構築するかなどのいわゆる「文法外コミュニケーション能力（以下、NGC）」のルールがそれにあたる。J.V.ネウストプニー（2001）によれば、コミュニケーション問題は、メッセージが通じなかったり、誤解されることもあるが、それ以上に何かを言うべきところで言わなかったり、沈黙を期待されている時におしゃべりしたり、あるいはリラックスするべきところでフォーマルな態度をとったり、期待された時に挨拶をしなかったり、また不適切に笑うような行動がコミュニケーション問題の主な根源であり、このような違反は否定的な評価を受け、コミュニケーションの挫折がおこる確率を高める要因だと、NGCの重要性を主張している。

3. 発話意図・パーソナリティーを伝える日本語

3-1. NGCにおける母語干渉・簡略化

第2言語でのコミュニケーションでは「母語干渉」という現象が起きることは広く認知されている。これはGRのみに現れる現象ではなく、NGCにおいても発生する。そして活用の誤りや不明瞭な発音のようなGRでの誤りであれば、非母語話者ゆえと許容されるケースも少なくないが、NGCの逸脱行為は話者のパーソナリティーを誤解される恐れがある。例えば、母語話者がなんらかの注意をしたのに対し、非母語話者は謝罪をせずに、その理由を述べる。こうした期待への裏切りは、母語干渉の可能性が否定できない。しかし注意した側は謝罪がなく言い訳をしていると認識し、注意された側は理由を説明しているが聞いてもらえないと感じる。

また「簡略化」という現象もコミュニケーション問題を生じさせる可能性が大きい。非母語話者はコミュニケーションに非協力的で「はい」か「いいえ」しか返事をしないとか、冗談に反応しないとか、発話の抑揚から無愛想な印象を与えることなどがある。しかし、こうした言語行動は、必ずしも非母語話者が彼らの母語を使っている時でも同じような行動を取っているとは限らない。母語であれば行っていたコミュニケーション行動が、第2言語を使用する際に、自分の表情を十分コントロールできず、簡略化され使われなくなる。こうしたことが結果として誤解を生じさせ、コミュニケーションの挫折が起こることがある。また時にパーソナリティーを誤解されたり、こうした例が繰り返されると双方の国民性を誤解させる遠因

となりうる。

日本語学習者は、日本人とよい人間関係を構築し維持し、日本社会の中で自己実現を目指している。そうであるからには発話意図が正確に伝わるためのトレーニングとして、日本語教育はGRだけでなくNGCをも積極的に授業に取り入れ学習の対象とする必要がある。

3-2. 『前田ハウス物語』

NGCのトレーニングを意識し、人間関係の構築そして維持を教材の主目的にした萌芽的な教材として『前田ハウス物語』（カイ日本語スクール2006）がある。『前田ハウス物語』では7人のキャラクターが登場し、この7人は年齢や国籍、趣味、職業が設定されているだけでなく、「交流分析」¹⁾の自我状態モデルを元にパーソナリティーやコミュニケーションスタイルが設定されている。また付属のCDはこれらのパーソナリティーを反映した話し方での会話が収録されている。

キャラクター例



- エリック：自分の価値観や考え方を譲らず、信念に従って行動しようとする人物。



- ミシェル：優しく、受容的で、思いやりをもって他者のために世話をする人物。



- フランチェスカ：冷静で客観的で、事実に基づいて検討・判断する人物。



- アンドリュー：明るく無邪気、自分の欲求・感情に従って行動する人物。



- ミンス：協調性があるが、時に自分の感情を抑えて他者に従順な人物。

教材はS.リスガード（Lysgaard, S 1955）のU字適応曲線を踏まえ「出会い」「衝突」「理解」という段階を踏んでいる。「出会い」編では異文化の中に身を置いた時、当初は見るもの聞くものが楽しく新鮮なハネムーン期、「衝突」編では、自分の価値観との違いからいろいろな摩擦を生じ、心理的にも不安定になる葛藤期、「理解」編では異なる価値観や行動様式が理解できるようになっ

て適応していく適応期を経る。

従来の日本語教材にはまずコミュニケーション上の摩擦などは起こらず、情報のやり取りが主な学習対象となってきた。また「今何時ですか」という問いには時間を聞くという機能でしか学習が行われず、言い方や状況に応じて「もう夜遅い。静かにしろ。」だとか「遅刻だぞ。急げ。」と意図が変化するといった「言外の意味」については学習の対象から外れてきた。しかし、「前田ハウス物語」では7人のキャラクターを設定し、言葉遣いや、声のトーン、イントネーション、スピードなどのプロソディーを意識させる会話により、発話意図を把握する力が学習対象となっている。またモデル会話を模倣することで、発話意図を誤解なく伝える力が養われる。

4. 授業実践とその効果

4-1. 授業目的と実践方法

長崎ウエスレヤン大学の日本語スピーキングⅡという授業において、『前田ハウス物語』を使用し、週に1回45分間、全15回に渡り授業を行った。授業受講者は日本に半年滞在している初級後半の学習者26名（中国19、タイ4、ベトナム2、フィリピン1）であった。

授業目標は、状況に応じて話し方を変え発話意図を正確に伝えられること、とした。

そのために授業では教科書とCDを使いながら、
1. 話者の発話意図の把握 2. 登場人物のキャラクターの把握 3. 会話の模倣、を行った。そして学期後半には4. ロールプレーによるシミュレーションを行った。

授業では会話に使用される語彙や表現は既習項目が多くあったが、会話意図をつかむこと、どのような言い方をするとそのような印象を与えるのか把握すること、そして会話を模倣することを学んだ。登場人物のキャラクターを把握するために、各回特定の人物の会話を集中的に聞いた。そして教材作成の意図でもある、喜怒哀楽の表し方、文末のイントネーション、語気、そしてトーン、オーバーラップなどプロソディー的要素による意図の伝わり方の変化に焦点を当て学習を進めた。

4-2. 授業評価

このような授業をつづけ、学習者の中に少しずつ変化が見られた。一部の学習者は普段の会話においても教科書の会話を真似して話したり、会話

授業でない時にも他の学習者の発表を聞き、「今の話し方はコンピュータみたい」などと指摘する場面が見られた。これは学習者がプロソディーに注意を払うようになり、それにより発話意図が変わることを認識したからに他ならない。

また学期終了時に学習者にこの授業で気づいたことをアンケートにより調査した。全ての学習者は場面にに応じて言い方が変わることを意識していた。また下記の（5）のように教室外であっても母語話者を観察し、話し方をコントロールしようとしているのが伺えた。ただ、（6）や（7）のように意識の変化はあるものの、実際の運用に関しては難しいというフィードバックもあった。

- （1）お願いする時、ごめんなさいという時はゆっくり真面目な声で話します。
- （2）今、親切に話すことができると思う。
- （3）会話の時、相手の話の音調をまじめに聞かないではいけませんから、違い音調では違い感情があります。
- （4）日本語では勉強した日本語と話す日本語は違いますから、このクラスのおかげで日本人の友だちと話す時、だいたい気持ちが分かりました。コミュニケーションが大丈夫です。
- （5）この授業の後、話し方を注意して話している。日本人は小さな声で話すので、自分も小さな声で話していた。でも、友達と話す時は大きい声で話してもいいと分かった。
- （6）話す内容をみて声の表情を変えたいです。でもあまり出来なくて困ります。
- （7）話し方によって、どこからが嫌な言葉、日本人が聞いても怒らない言葉が難しいです。

授業の効果測定としてロールプレー会話を行った。留学生活で実際に起こりうる場面を設定し、教師は大学スタッフの役割を演じ、学習者は大学生としてロールを演じた。課題は母語話者であっても言い出しにくいような依頼場面とし、相手に不快にさせないように様々な心配りを必要とする場面を設定した。実施の前に文法的な誤りは意識せず、自分の意図を正しく伝えることを意識し話すように留意した。

会話は録音し、教師1名と母語話者2名との3名で学習者の発話の好感度を10段階で評価した。好感度という極めて主観的なことも複数の者で評

価することで客観性を高めるよう配慮した。評価の方法として談話の進め方や、声のトーン、イントネーション等が課題の場面に対し適切であったか否かを細目にわたって評価しその合計をもって最終的な評価とする手法も考え方としてはあるのだろう。しかし、コミュニケーションの成功か否かという全体的な評価は、そうした様々な要素を分析的に評価しその総和とする以上の何かであろうと考えた。そのため検討すべき課題があるとは思いつつも以上のような評価方法を採用した。

結果非常に難しい課題であるが、約7割以上の学習者は、話し方に好感を持つことが出来た。そしてロールプレー後の聞き取り調査で、ほぼ全ての学習者がキャラクターを意識し、イントネーションを始めとする話し方に意識をして会話したことが分かった。この授業を受講していない非受講群へのロールプレー課題を実施していないため、この授業で行ったトレーニングの有無による効果の比較はできない。しかし、ほぼ全ての学習者がGRだけでなく、NGCの重要性を意識したという結果は大きな成果だと言えよう。

5. まとめにかえて

文法外コミュニケーション能力(NGC)には、『前田ハウス物語』で主に教育対象としている発話意図を正しく相手に伝える、話し方のスキルの他に様々なルールが存在する。例えば、どのように話を切り出すかという点火のルール、会話をする場所や時間帯などを選択するセッティングのルール、誰と話すのが適任かという参加者のルール、フォーマルやインフォーマルな言い方、または方言を使用するか等を選択するバラエティーのルール、会話の参加者に対しどのような内容を話すべきか話さぬべきかを選択する内容のルール、挨拶などの習慣に多く見られる形のルールなどだ。

これらのルールも非常に重要で軽視できないスキルだ。現に、授業の効果測定として行ったロールプレーで約3割の学習者は何らかのルールから逸脱が現れた。話しはじめが唐突であり点火のルールを逸脱したもの、謝罪すべきところで理由の説明ばかりしているという内容のルールからの逸脱などだ。今後はこのようなルールに関しても積極的に教育対象に取り組む必要がある。

またその一方で異文化共生を目指すためには、ゲストである非母語話者のみが日本的なコミュニケーションを学ぶだけではなく、ホストである日本語母語話者もコミュニケーションスタイルが時

代と共に変化するという寛容な姿勢が必要であろう。

註

- 1) 交流分析 (Transactional Analysis, TA)
アメリカの精神科医 エリック・バーンの提唱した精神分析の手法。教育関係や企業等でコミュニケーショントレーニングの効果的なツールとして応用されている

参考文献

- J. V. ネウストプニー (1995) 『新しい日本語教育のために』 大修館書店
- J. V. ネウストプニー (2000) 『今日と明日の日本語教育』 pp.108-113アルク
- J. V. ネウストプニー (2001) 『外国人とのコミュニケーション』 pp.40-85岩波新書
- Lysgaard, S. (1955). Adjustment in a foreign society: Norwegian Fullbright grantees visiting the United States. *International Social Sciences Bulletin*, 7, 45-51.
- 野田尚史編 (2007) 『コミュニケーションのための日本語教育文法』 pp.9-10くろしお出版
- スリーエーネットワーク (編) (1998) 『みんなの日本語』 スリーエーネットワーク
- 山本弘子監修 (2006) 『前田ハウス物語 「出会い」 編』 カイ日本語スクール
- 山本弘子監修 (2006) 『前田ハウス物語 「衝突」 編』 カイ日本語スクール
- 山本弘子監修 (2006) 『前田ハウス物語 「理解」 編』 カイ日本語スクール
- 山本弘子・松尾恵美 (2008) 「非言語トレーニングに向けた新たなアプローチ～『キャラクター会話』の開発を通して～」『平成20年度日本語学校教育大会』 pp.61-67 財団法人日本語教育振興協会